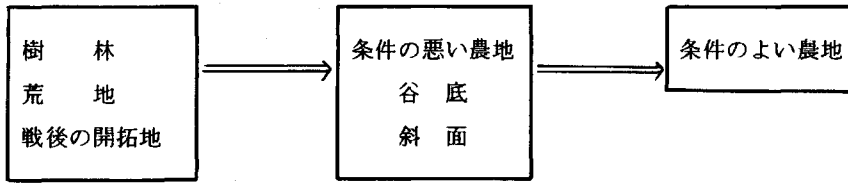


確かに大きいものがあるであろう。これら農民の影響を中心にし、調査をもとに住宅地化の進んでいく土地の順を考察してみると



という傾向が見られるように思う。これらは単に農地法による規制以外に、農民の土地への執着心の強弱による。また、これからの宅地化を考えるにあたって問題となるのは、農民の農業経営への積極性であろう。積極的に経営転換をはかって周囲の環境変化に合わせられるかどうかである。なお、これらの考察はまだ多くの検討を加える必要があり、多くの例にあたる必要があると思われる。

船橋市の住宅地域を考えるにあたってさまざまな問題があることに気づく、今回の調査では規模の大きい団地を中心に調査を実施したが、その結果を見ると、孤立状態の団地や、地域全体としての計画性に欠けるために地域の中心施設に欠け、オープンスペースにも欠ける地域が多くなっているが、これも住宅問題を考える上で重要な問題となるであろう。

松代町における農業的土地利用の変化

—千曲川右岸の自然堤防を中心として—

笹 森 久美子

松代町は、自然堤防、後背湿地、山麓緩傾斜地と、バラエティに富んだ自然条件が備わっている。自然堤防においては、かつては割替慣行が行なわれていた。本論では、自然条件と土地利用のかかわりあい、割替慣行が現在の土地利用に及ぼしている影響、更には日本一の長芋の産地となり得た要因、現在生じている問題などを明らかにすることを目的としている。

第一章で松代町の概観を述べ、第二章では農作物の変遷を藩政時代から現在まで、時代を追って述べた。第三章では割替制度がどのような影響を及ぼしているかということと、自然堤防における商品作物栽培の発達・展開を通して、土地利用を考察した。後背湿地、山麓緩傾斜地、豊栄地区、清野地区の土地利用については第四章で述べた。

松代町の農業的土地利用の特徴を明らかにするために、大きく5つに分類した。

1. 自然堤防

洪水の際の保障制度として行なわれていた割替慣行は、堤防建設の結果、洪水の危険がなくなり廃止されたが、その影響は、現在の土地利用にまでも及んでいる。堤外地では、千曲川に対して直角に、短冊状の土地景観がみられる。堤内地においては、一枚の畑の面積が狭く、何ヶ所にも分散している。

戦前は桑畑であった自然堤防も、戦後は長芋を中心とした商品作物が導入された。厚く堆積している軽鬆で礫のない砂質壤土という自然条件に加えて、集約的な経営が可能であり、むずかしい技術や多大な労働力が要求されない等の要因が絡み合って、日本一の長芋の産地が形成されたのである。

しかし、連作障害による褐色腐敗病の発生、新興産地の青森県の躍進、生産過剰による長芋の暴落などにより、53年度は大打撃を受けた。54年度には、ゴボウ、ニンジン等の根菜類、トマト、ブロッコリー、カリフラワー等の洋菜、果樹、桑へと、長芋からの転作が一部で行なわれた。しかし、技術・労働力等の問題から、転作は容易にはなされておらず、54年度の長芋の価格に期待をかけている状態である。

2. 後背湿地

水田が卓越しているが、水田から住宅地への転用がなされ、宅地化の波が押し寄せている。

3. 山麓緩傾斜地

戦後、桑畑の中に果樹がはいつてきたが、果樹生産地としては出遅れ、完全に果樹栽培地帯へと移行したわけではなかった。現在でも桑園率は依然として高く、養蚕が大きなウエイトを占めている。果樹は、リンゴ、桃、ブドウ、梨、梅、杏と多彩であることが、特徴である。

4. 豊栄地区

現在では、水田と桑園が中心である。戦後、桑園の一部が開田したが、現在ではそこから転作が進んでいる。水田からの転作は、飼料作物が中心である。普通畑や果樹は少ない。

5. 清野地区

近郊市場を中心に、季節感を早めた野菜供給団地が形成されている。トマト、キュウリ等の野菜類と花卉を中心に栽培している。

大きく5つに分けてみたが、この他に特殊な地区として、唯一の酪農地帯である稲葉も存在する。

このようにみていくと、水田、野菜畑、果樹、桑園、施設園芸、菌茸類、酪農と、日本の農業の縮図を、松代町にみたような気がしたのである。

常願寺川扇状地における農業水利の変化

佐藤 千佳子

今日、社会では“水不足”問題が大きくクローズアップされ、節水社会への対応が迫られている。富山県の常願寺川扇状地は、北アルプスの山々を背後にもち、元来水の豊富な地域である。その恵まれた水条件をより一層有効に活用して、多角的な水利用を行う実態とその影響を考察してみた。

第1章では、常願寺川扇状地の自然環境・人文環境を概観し、第2章では常願寺川から取水する農業用水の歴史について述べた。その際、上流で一括して取水する、いわゆる合口用水開削の左・右兩岸の差に注目した。第3章では富山市の都市化に伴い、常西用水が都市用水に転用されたこととその影響を考え、第4章では、常西用水と発電事業との関連をとりあげた。

まず、常願寺川左岸においては、明治24年の大洪水による被害が大きかったことを直接的契機とし